

# 大学博物館との出会い

鹿児島大学総合研究博物館 大 木 公 彦

文部省学術審議会報告を受けて、1996年5月に我が国にも大学博物館が東京大学に誕生しました。この話をするに「大学には博物館がなかったの」、あるいは「大学に博物館を作ってどうするの」という質問がよく返ってきます。国が設置した総合博物館は東京大学総合研究博物館が最初なのです。明治以来、日本の大学で研究によって蓄積され、教育に使用された貴重な学術標本や資料の多くが、その研究・教育に携わった先生の退職とともに失われ、あるいは研究室の片隅に放置されていることに危機感を感じた文部省が、大学博物館の設立を思い立ったと言われていますが詳しいことはわかりません。しかし、一部の研究者は貴重な研究標本を守るために、外国の博物館へ寄贈していると聞いていますし、鹿児島大学に残された学術標本や資料の現状を見るにつけ、大学博物館の必要性を痛感します。

さて、東京大学に続いて京都大学、東北大学、北海道大学、名古屋大学、九州大学に博物館が誕生し、2001年4月には鹿児島大学総合研究博物館がスタートしました。新制大学ではただ一つの鹿児島大学総合研究博物館ですが、教員スタッフは4名です。このスタッフ数で、鹿児島大学に保存されている100万点をこえる貴重な標本や資料を整理し、管理保存することを考えると胃が痛みます。大学博物館のあるべき姿は最後にお話するとして、私と大学博物館の不思議な縁についてお話ししたいと思います。

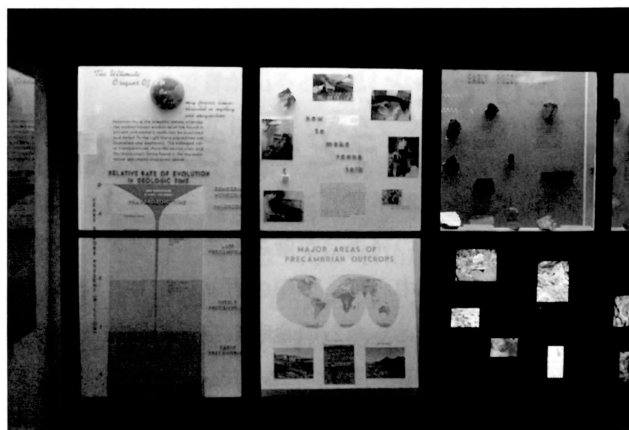
大学博物館との出会いは1975年にさかのぼります。この当時、私自身が大学博物館スタッフになるとは夢にも

思っていなかったのですが、博物館との縁はこの頃から始まっていたのです。この年にカナダのハリファックスで開かれた第1回の底生有孔虫国際学会（与論島や沖縄でお土産として売られている星砂は有孔虫の1グループです）へ参加し、ついでに一ヶ月間ほどアメリカとカナダの大学、博物館、美術館を訪ねてまわりました。1ドル360円の時代に50万円ほど借金しての旅行でしたが、当時の私の給料が5万円ほどでしたから、儉約第一の慎ましい旅になってしまいました。カナダに入国する前にニューヨークのアメリカ自然史博物館やメトロポリタン美術館、ボストンのハーバード大学博物館を訪れました。ハーバード大学博物館の展示は全部見学すると数日はかかりそうな量で、1日しか割けなかった私は、地質学（鉱物・岩石学、古生物学など）部門と考古学部門、それもインカ・マヤ文明の展示の見学のみで終わってしまいました。博物館を持つ大学があることを知らなかった私は、研究者（学芸員）に「アメリカの大学には博物館があるのですね」と尋ねたら、意外そうな顔をされ「ここはユニヴァーシティ（総合大学）ですから」との答えが返ってきました。

国際学会の会場であったハリファックスのダールハウジー大学で、多くの学会参加者とともに学生寮に宿泊した私は、夏休みにはほとんどの学生が大学から居なくなること、大学のホールが市民向けの文化講演会や演奏会の会場になること、大学が地域の文化を担っていることを知って、一種のカルチャーショックを受けました。当時の日本



ハーバード大学博物館



ハーバード大学博物館の地球の歴史に関する展示

経済からすれば、その差は仕方のないことでしょうか、その後、経済大国になった日本が1970年代のアメリカやカナダの文化レベルにまで達したとも思えないことは残念です。

国際学会を終え、再びアメリカへ戻り、知人のいるシアトルのワシントン大学、ユタ大学、カリフォルニア大学パークレイ校を訪れたのですが、そこでも様々なカルチャーショックを受けてしまいました。ユタ大学では、鹿児島県立博物館（文化センター）にある恐竜化石の組み立て指導を行なったマドセン教授の研究室と大学博物館を訪れたのですが、標本室の恐竜化石の量や博物館の立派さは、日本の一地方都市にある大学の学芸員には刺激が強すぎました。その後の私の研究・教育に対する姿勢や考え方が、1975年のアメリカ・カナダ旅行の体験と深くかかわっていることは否定できません。この時に、本物に触れる重要性、つまり現場に出かけて直接観察し、そこで得たデータや標本を記録し、その情報を社会へ発信する大切さが理解できたような気がします。

その後、大学の標本の管理・保存と展示や現地保存について考えさせられる経験をすることができました。1994年3月から9月までの7ヶ月間、オーストリアのウィーン大学に留学したことがあります。目的は、アドリア海最奥部の海底表層堆積物の採取と、その中に含まれる底生有孔虫群集を調べることだったのですが、2回の調査期間以外のほとんどの日々はアパートからウィーン大学に通う毎日でした。

ある日、ウィーン大学教授のホーヘンエッガーさんがウィーン郊外の小さな田舎町に私たち家族を連れて行きました。町はずれの小高い丘近くの狭い駐車場に車を止め、山道を丘の中腹まで歩いていくとそこに粗末な山小屋があり、ノックをすると青年が一人出て来ました。ホーヘンエッガーさんが声をかけお金を払うと、そばの洞窟の入口を開

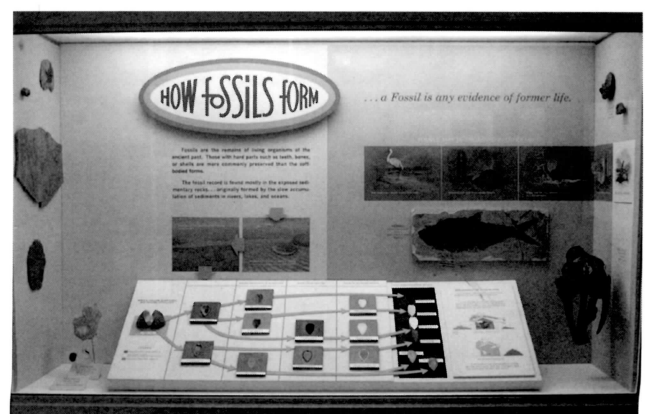
け、電気をつけて中に案内してくれました。ホーヘンエッガーさんによると、この洞窟から虎の骨が出土し、その骨格標本はウィーン大学に保存され研究中だそうです。狭い洞窟の一部に、骨格標本のレプリカが出土した状態で展示してありました。見るべきものはそれ以外にはほとんどなく、すぐに見終わってしまったのですが、一日にここを訪れる人は数人いるかいないかと思われるそのような場所でも、ガイドの人が観光客を待っていることに驚かされました。日本では文化遺産を展示していても、客が少なければ閉めてしまうでしょうし、それ以前にこのような場所を一般公開するとは考えられません。

ウィーン大学には、近くに自然史博物館があるせいか、大学博物館はありませんが、地質学教室、古生物学教室の廊下には素晴らしい展示がありました。教室そのものが、それぞれの分野の博物館でもあるのです。岩石・鉱物・化石などの標本だけでなく、現在、教室のスタッフが研究している最新のデータがポスターとして展示してあるのです。学生はこれらの標本やポスターを見ながら勉強することは言うまでもありません。一人の中年の女性が、毎日のように少しずつ標本の塵をはらったりしている姿に、標本を大事にする大学の姿勢が読み取れ、感動したことがあります。

ホーヘンエッガーさんから、自然史博物館に、1872年から1876年にかけて世界の海を航海したチャレンジャー6世号によって採取された有孔虫タイプ標本があると聞いて、数日、自然史博物館のルーグル博士の研究室に通いました。大きな木箱の扉を開けると高さ2cmほどの引き出しがたくさんあり、その引き出しには有孔虫タイプ標本がぎっしりつまっていました。赤い有孔虫用スライドの真ん中に穴が一つあり、ブラッディが記載した有孔虫が固定され、並んでいました。左側の白紙には“CHALLENGER”，標本番号、



ユタ大学博物館の恐竜化石



ユタ大学博物館の化石の成り方に関する展示

採泥地点の位置、水深そして“H. B. BRADY”の名が、右側には有孔虫の名前が書かれています。19世紀のものとは思えぬほど保存が良く、カビがはえたり、汚れたりしていません。ルーグルさんはチャレンジャーレポートのオリジナル版を出してくれ、顕微鏡でタイプ標本を見ながら、ブラッディの記載を読むことができるという有孔虫を研究する者として最高の至福の時を過ごすことができました。

実は、鹿児島大学中央図書館にはチャレンジャーレポートのオリジナル版、全50巻が揃っています。私の上司であった早坂元学長（当時は理学部教授）が、ニューヨークで古書として出されたというニュースを知り、大学に働きかけて1983年に購入されたものです。当時の鹿児島大学図書館報には、早坂先生の文で“Challenger Report”として有名であるが、その完全なセットを国内で見るとは、従来殆んど不可能であった」と書かれています。有孔虫のタイプ標本を見ることはできませんが、チャレンジャーレポートのオリジナル版を手にとって見ることでできる私たち鹿児島大学のスタッフや学生は、なんと幸せなことでしょう。

かつて朝日新聞に「迫る独立行政法人化 - 欧米の美術館・博物館と比較して」という記事が連載されました。日本の7つの国立美術館・博物館の職員の総計は334名、それに対して、例えばニューヨーク近代美術館の1館だけで職員が600名（学芸員は45名）、オランダのライクス・ミュージアムは職員が400名だそうです。ところが、大学博物館の教員スタッフは東京大学博物館で10名、京都大学博物館が9名、九州大学博物館が8名、鹿児島大学博物館は4名で、お寒い限りです。3年前の日本経済新聞の「大学に眠る宝の山」という記事の中に「予算・人手なく財産見殺し」の小見出しがついていましたが、的を射ており感

心したことがあります。しかしスタートした以上は南九州から沖縄に至る地域の大学博物館にふさわしいものを構築しなければと思っています。

大学博物館の重要な役割に、大学の研究者が収集し、研究してきた貴重な標本や資料を整理し、管理保存して、学内外のこれからの研究に役立てていただくことがあります。同時に、大学で行なわれた貴重な研究の数々を、展示や出版物を通じて社会へ発信し、還元しなければなりません。教育・研究や様々な業務に追われ、忙しい毎日を送っている大学の研究者に代って、研究標本・資料を整理、管理保存し、貴重な研究結果を社会に紹介していくことが大学博物館の基本的な業務だと思います。

その一方で、学生さらには多くの方々に自然科学・社会科学を学ぶ楽しさを知っていただく、いわゆる啓蒙活動にも力を入れなければならないと考えています。今、大学博物館のスタッフと考えていることがあります。それはフィールド・ミュージアム構想を実現することです。一昨年、文部科学省もこれを認め、地域貢献特別支援事業費をつけてくれました。南九州から琉球列島にかけて自然や人々の営みから生じる文化遺産の中には、切り取れない貴重な標本や資料がたくさんあります。それを現地保存し、多くの方に現地を、現場を訪れて本物に触れていただくことこそが大事だと思っています。そのためには博物館・美術館はもちろんのこと、地域の様々な団体との連携をはからなくてはなりません。鹿児島大学総合研究博物館が、文化の担い手として、大学の内と外からその存在を評価され、連携していただける夢を実現したいと思っています。



ブラッディが記載した有孔虫標本  
（チャレンジャー6世号で採取）



有孔虫標本とチャレンジャーレポート